

表紙写真によせて
苗木を運ぶ一家

一家総出で、まだ若い木の苗を根っこから担いで、畑のあぜ道をビートルズよろしく闊歩する。彼らは故郷に帰ってきたばかり。自分たちの土地の境界を示すために、これから木を植える。バケツ持ちの少年は、木が根付くまでは水やりが日課になって、毎日水場への往復に忙しくなるだろう。

「祖国の村に水路が引かれたらいい。帰れば、畑を耕せる」そんな噂を頼りに、干ばつで一度は故郷を捨てなければならなかった彼らは、長い家路を辿ってきた。その耳で実際に流れる水の音を聞き、陽光を照り返し光る水面を見た時、どんな気持ちであったろうか。

水路沿いの木々が小鳥たちに憩いの場を与え、そのさえずりが、風に揺れる枝葉や水のせせらぎと共演して美しい音楽を奏でる。詩を愛でるというアフガン人の豊かな感性は、農村の美しい風景とそこから生まれる美しい音楽で培われたのかもしれない。

いつか彼らの木も大きくなり、刺すような陽の照りつける大地に柔らかな陰を作る。農作業に疲れたらしばし手を休めて、木陰で小鳥のさえずりを子守唄に金色のまどろみに落ちていく。そんな風景を思い浮かべながら、彼らは木を植える。